

ミュージアムパーク茨城県自然博物館
令和7年度第2回博物館協議会の開催結果概要（議事録）

1 日時

令和8年3月6日（金）13時30分～15時00分

2 場所

ミュージアムパーク茨城県自然博物館 講座室

3 出席者

樋口正信委員（委員長）、生田目美紀委員（副委員長）、浅野直俊委員、坂本和弘委員、高尾戸美委員、中村由香委員、藤咲富士子委員

※事務局出席者

横山一己館長、菅野弘司副館長、泉水正和副参事兼管理課長、岸川将史企画課長、小泉直孝教育課長、池澤広美副参事兼資料課長、小池涉首席学芸員、栗栖宣博主査、

清水麻里子係長、百瀬裕子主事、川村詩音主事

【文化課】

川野辺恒星主事

4 議事概要

(1) 会議の成立について

本日の協議会は委員13名中7名の参加があり、会議は有効に成立する。

(2) 議案説明（事務局）

○議題

- ① 令和7年度後期事業の報告について
- ② 令和8年度事業の計画について
- ③ 予算・決算などについて
- ④ その他

(3) 質疑・意見交換

○A委員

教育普及事業について、まだ知られていない可能性があるため、周知を強化すれば活用が広がるのではないかと。冊子などはデジタル配信にすれば印刷コスト削減にもなる。

移動博物館については、実施数に限りがあり全て希望に添える状況にないと思うが、教育用資料の貸出については、県内の学校等で多く利用されており、非常に有効な取組と感じる。

また、若い世代は、「Instagram」、「X」（旧 Twitter）などの SNS から情報を得るため、フォロワーを増やすことが大事。

企画展はいつも魅力的で、家族連れからもとても好評なようである。国立科学博物館との連携も良い取り組みと感じる。

○事務局

SNS 発信については遅れていると認識しており、現在「X」「Facebook」を運用しているが、「Instagram」はまだ開設していない。

フォロワーについて、「X」に関して言えば、5年前は約 1000 件だったものが、現時点では約 6,000 にまでになったものの、当館の利用者数から考えたらまだ少ないと感じている。

デジタル資料については、現在 PDF が中心だが、将来的にはデジタルブック化も検討しているものの、特にサーバー利用料等の毎年かかるランニングコストが課題となっている。

また、巡回展については、当館としては初めての試みとなる。経費や労力を削減できる可能性もあるが、警備のための人員確保による費用増や巡回展特有の事務作業が発生することも考えるため、実施後に検証し、今後に生かしていければと考えている。

○B 委員

入館者数が増えているのはすばらしく、いつ来ても親子連れの利用が多く、館が賑わっている。

リピーターが多いことから、常設展示の魅力も高いのではないかと感じる。

森林再生や自然管理の取組は非常に大事。自然のままに任せることが理想かもしれないが、人の手を入れないと自然を守ることは難しく、生物多様性が低下する場合もあるため、積極的にかかわることで自然環境を守ることにつながるのではないかと思う。

菅生沼の例でいえば、保護区域に指定された後管理が難しくなっている状況も見受けられ、水質悪化等による希少な魚の減少事例あったりしている。博物館としては菅生沼の管理に直接関与するというよりは、今後（県などが）どのように管理するかという方向性に対し、専門家としてアドバイスするという関わり方があってもよいのではないかと思う。

学習支援の分野については、学校向け資料が現場の教員に届かないこともあるかもしれないので、教員研修などで配布するなど、引き続き学校現場で利用しやすいようにお願いしたい。

○事務局

菅生沼は、県や地元市町村が管理に関わっている。

博物館の関わりとしては、沼の管理というよりは、主にそこに生息する生物の調査活動を実施している。

○C委員

入館者は増えているが、「高校生・大学生」の区分が50%減少している理由を教えてください。また、中期計画で掲げている「誰もが楽しめる博物館」の中で触れている、「多様な利用者」とは具体的に誰を想定しているのか。

○事務局

高校生・大学生区分の大幅減少は、料金区分の変更が主な要因と思われる。

(大学生が「大人」区分に移動した)

多様な利用者としては、様々な年齢層に加え、外国人や障害を持った方々を想定している。

それらの方々による利用の実態を把握するため、現在期間を限定(約1カ月)して、外国人来館者にむけた調査を開始したところ。

設問の例としては、「どこから来たか」・「何回くらい来たか」・「何日間滞在しているか」などを設定した。

今回調査を始めるにあたっては、国名(地域名)を表記するにあたって政治的な配慮をどこまですべきか、特に国旗の使用についてはデリケートな問題ということがわかり、軌道修正しながら調査を実施した。

○C委員

SNSについて、若い世代は「Instagram」が中心ツール。

メディア戦略として、媒体ごとにターゲットの違いがあり、「Facebook」は50~60代、「Instagram」は若者向けといった感じである。

当館のファンに向けた情報発信としては、メールマガジンも有効なものと思う。

また、新しい広報形態として、ポッドキャスト(ラジオ)の音声にのせた発信、例えば、研究者インタビューなどは興味ある人にとって魅力的なコンテンツに感じるのではないかと。(音声であれば、運転中などでも気軽に情報を取得できる)

話は変わるが、以前訪れた博物館では、古くなった展示資料を廃棄せず、(別のコーナーで)改めて展示したことで、過去に来たことのあるお客様が「懐かしい」と感じてくれることがあった。スペースの関係もあるだろうが、古い展示にも来館者の思い出があるので、全て廃棄せず一部残すことも検討してもらえればと思う。

○D委員

昆虫の住みかづくりなど、子どもの教育に活用できそうなものも多く、自分の園でも実施可能なら、ぜひ取り組んでみたい。「講師派遣事業」として、博物館職員の方に園に来て講義していただくことは可能か。

小さな子どももスマホでYouTube等の動画を見ることが多く、自然体験が減少していることが大きな課題ではないかと感じている。そのような現状から考え、博物館において実物に触れたり自然を感じたりするような体験活動はとても重要なこと。

話は変わるが、先ほど話題になった菅生沼のことで気になるのは、白鳥に餌を与える人がいること。

環境悪化が懸念され、マナー啓発等の必要性を感じる。

○事務局

当館職員を派遣しての講義等については可能である。

事前に連絡いただき、詳しく内容を聞かせてもらった上での対応となるので、担当までお問合せいただきたい。

○E委員

入館者の県外比率60%以上はすごいと感じるが、県立の施設なので、県民利用を増やす施策も必要と感じる。県内利用を増やす具体的な手法として、例えば、県民割引の導入など検討してみてもどうか。

また、広報については、若い保護者はSNSを中心に情報を取り入れていると思われるので、SNSの更なる活用を希望する。

余談であるが、紙媒体のPRとしての新聞掲載（企画展記事）は、毎回楽しみにしている。

○事務局

料金の件については、基本的には県内と県外を分ける体系になっていないが、例外的に学校団体についてのみ県内利用を無料として、県外利用との差を設けている。県内では水戸以北、特に県北地域の利用がほとんどなく、この地域に対するPRをどのように行い、利用につなげるかが課題と感じている。

また、SNS活用については、昨年度は利用者が多いと思われる「Instagram」に広告を載せるなど、当館としては新たな切り口でPRしてみたところであるが、費用に対しての効果が見えにくいと感じた。そこで、今年度は、当館の来館層を意識して、お出かけサイト（いこーよ）に広告を掲載した。現在、レポート等の検証作業を行っており、それらの結果を踏まえ、広報活動に役立てていきたい。

○F委員

リピーター7割、ヘビーユーザー4割を維持している点は非常に評価できる。また、1か月休館したにもかかわらず入館者が増加しているのはすごい成果。入館者数を見てみると、企画展開始時期に入館者が増えていることがわかり、企画展効果の大きさとともに、オリジナル企画展を充実させることが博物館にとって重要な活動だと理解した。

質問として、「地域の多様な主体との連携」とは具体的にどのような主体を想定しているのか。また、障害者利用は増えているが、特別支援学校の利用が減った理由はあるのか。

意見（提言）としては、高齢化を見据え、展示だけでなく、動線や施設全体の整備などを含めた活用計画が重要。

また、デジタルアーカイブ化については、将来的に重要になるため、情報共有の仕組みやデジタルコミュニティなども視野に入れて進めるとよい。ボランティアや地域の人材（写真愛好家など）を活用すると、データ作成や誤字チェックなどで協力が得られる可能性がある。

最後に、生き物保護や地域との関係など、博物館は社会的役割が大きい。施設は「思い出をつなぐ場所」としての価値も重要。

○事務局

地域連携について、主な連携先は、坂東市及び常総市などの市役所や観光部門。連携の具体例として、地域イベント・祭りへの参加、コミュニティバスのルート調整、近隣施設（例：ミュージアム施設など）との協力があげられる。

引き続き、地域と相互に利益のある関係を継続したいと考えている。

また、特別支援学校利用減少については、年度により利用のばらつきが大きく、担当教員の異動なども影響する可能性がある。

なお、障害者利用増加の要因は、福祉団体などの団体利用増加がそのひとつ。引き続き、多くの人を楽しめるような運営を目指していきたい。

○G委員

展示や活動がすべて新しいものに置き換わると、過去の記憶が消えてしまうのは少し寂しいと感じる。古いものにも価値があり、思い出として残すことも重要。

企画展を毎回見てきたが、特に印象に残っているのは、昨年6月まで開催していた「30年のありったけ」。最後の方に、館長をはじめとした各課の仕事を紹介するコーナーがあったと思うが、そこに警備員や清掃員なども含めて、博物館を支える多くの人々の存在を紹介していたことがとても印象的だった。この博物館が家族のような組織で支えられていることを感じた。

以上